

ランチョンセミナー(2)

1. ABPC（アガリクス菌糸体加工食品）の開発と研究の概説

須山 建

株式会社応微研 学術部

アガリクス茸（*Agaricus blazei* Murrill）の抗腫瘍作用は早くから注目され、20 年以上前から研究が進められてきた。10 年程前から次第に民間療法として用いられるようになり、現在ではがん患者の 1 / 3 はアガリクス茸を利用しているとも言われている。

発表者らは、アガリクス茸由来の活性多糖に着目し、菌糸体培養、酵素処理という方法を用いて、安定かつ安全なアガリクス菌糸体加工食品、ABPC を開発した。この開発の経緯やコンセプトについて報告し、さらに、現在までわかっている作用機序や、今後の展望について言及したい。

アガリクス茸の子実体（キノコ）と菌糸体の様々な成分を比較した。有用な多糖類であるベータグルカンの子実体と比較して菌糸体により多く含有し、構成糖も異なっていた。数種の多糖類酵素を用いて活性の比較を検討し、特定の酵素処理を行うことによって活性が著しく高まることが明らかになった。また、酵素処理によってより多様な多糖類が水溶化することが明らかになった。これらの知見をもとに、アガリクス茸を液体培養し、酵素処理することによって様々な生理活性を高めた ABPC を開発することに成功した。

現在までの免疫系の研究により、IL12 の産生を増強し、NK 細胞活性を高め、Th1 優位へと導く事等が分かった。